

No.2-1

【エッセイ】

私は、現在介護施設で働いております。ですから、福祉とは日頃から身近な距離にあります。その中で、感じたこと、思ったことをそのまま書いてみたいと思います。

「福祉のある風景」ということですが、私は福祉というものは何か特別なものではなく、社会の中にある「つながり」ではないかと思っています。ですから、福祉を何か特別なことと知っている方がいるならば、当たり前には社会の中には「福祉のある風景」がありますよと伝えたいです。

私は、今現在有料老人ホームで働いておりますが、そこに来る方一人ひとり、それぞれ違った背景・ヒストリーを以て入居されます。しかし、皆一人ひとり入居したあとでも今までと変わらない生活をしていきたいと思っているし、実際、力強く活動されています。残念ながら、認知症などが進んでしまい、自分のことを自分で出来なくなった方でも最後まで言葉は話せなくても自分らしさを私たちに示してくれます。

以前、あるご入居者さまはこうおっしゃっておりました。

その方は、むせこみがあるので水分はとろみで提供、食事も普通食とは形態を変えて提供しています。

しかし、あるとき、その方ははっきりと次のように言いました。

「私は、喉に食事が詰まって死んでもいいですから普通の食事が食べたいです」と。

その方の言葉をどのように受け止めるでしょうか？

私は、その方の言葉は本心だし、全くその通りだろうと思います。

とはいえ、施設に入居している方に対して、本人が了解しているからといって喉に詰まって死ぬ可能性のあるものを提供することはできないわけです。

「福祉のある風景」とは、高齢者や社会的弱者をただ弱者としてみるのではなく最後まで一人の人間として暖かい眼差しを向けていける社会のことだと思っています。さきほどの高齢者の方で言えば、本人の気持ちを汲んで普通の食事を提供してあげること——それが無理でもそれに共感出来ること——が大切ではないかと思っています。